

教育研究業績書

2020年10月27日

所属：看護学科

資格：教授

氏名：竇田 穂

研究分野	研究内容のキーワード
看護学	精神看護、アディクション、薬物依存、グループアプローチ、慢性の病いの言いづらさ
学位	最終学歴
博士（看護学）	日本赤十字看護大学大学院看護学研究科 精神看護学専攻 修士課程 修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
1. 系統看護学講座 専門分野II 精神看護の展開 精神看護学 [2] 第4版、医学書院	2013年1月発行	一部執筆（第5版：2017年2月発行） 医学書院が発行している看護学教育の教科書の中で、精神看護学分野の教科書の一部を執筆した。
2. 日本精神科看護技術協会認定看護師養成「薬物・アルコール依存症看護」	2010年7月	精神科認定看護師養成研修会の教科書
3. 教員免許状更新研修会テキスト	2010年5月	教員免許状更新研修会「学校生活における保健上の課題と対策」の中で、「薬物依存症と予防」に関する講義のためのテキスト教材を作成した。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 大阪市こころの健康センター「地域における断薬継続促進モデル事業」スーパーバイザー	2017年～現在	大阪市こころの健康センターが実施しているモデル事業におけるスーパーバイザーおよび関連する講習会の講師
2. E P A 看護導入研修「精神看護学」講師	2010年～2012年	経済連携協定（EPA）に基づく看護師候補者受入れにおける「看護導入研修」にて、精神看護学（1コマ/年）
3. 日本精神科看護協会の依頼による研修会講師	2002年～現在	日本精神科看護協会（旧 精神科看護技術協会）の主催する、看護師を対象とした研修会（認定看護師養成研修含む）における、「対人関係」「グループアプローチ」「アディクション」「セルフヘルプグループ」等に関する研修会講師（年間8コマ程度）
4. 日本看護協会（支部）研修会の講師		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 看護師	1980年5月6日	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. アディクション問題にかかわる看護師へのインタビュー調査（サンフランシスコ）	2014年11月15日～2014年11月23日	米国サンフランシスコにおいて、薬物依存症患者への看護を実践している看護師へのグループインタビューをおこなった。また、薬物依存症治療施設での見学研修や、日本で実践している看護師のサポートグループについて、スーパーバイズを受けた。 日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C））「アディクション問題にかかわる看護師支援モデルの試案作成」の一部
2. アディクション問題にかかわる援助職支援に関するフィールド調査（サンフランシスコ）	2013年11月16日～2013年11月22日	米国サンフランシスコにおいて、アディクション問題をもつ回復支援に取り組んでいる施設の視察を行い、研究協力への依頼および今後のインタビュー調査の予定について検討した。 日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C））「アディクション問題にかかわる看護師支援モデルの試案作成」の一部
3. 薬物依存症回復支援団体Freedomによる薬物依存症回復支援システムの調査（サンフランシスコ）	2003年3月15日～2003年3月21日	サンフランシスコの薬物依存症治療施設及びドラッグコートを訪問し、サンフランシスコの薬物依存症回復支援システムについてフィールドワークを行った。
4. 大阪市立大学在外研究員（D項）（ボストンにおける薬物依存症看護に関する調査）	2001年8月23日～2001年8月31日	薬物依存症患者への看護に関する研究—ボストンにおける薬物依存治療システム及び看護の実態調査を行った。
5. 大阪市立大学国際学術交流派遣（サンパウロ大学学術交流）	2001年7月24日～2001年8月9日	大阪市立大学国際学術交流派遣 サンパウロ大学学術交流。ブラジル連邦共和国サンパウロ市で、精神医療における薬物依存症患者への看護の現状調査を行った。
4 その他		

職務上の実績に関する事項				
事項		年月日		概要
4 その他				
研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. 看護診断ハンドブック 第11版 (翻訳)	共	2018年3月	医学書院	L. J. Carpenito: Handbook of Nursing Diagnosis 15th Edition, Lippincott, USA, 2017の翻訳 担当カ所: pp461-524、pp727-729
2. 集団精神療法の実践事例30)	共	2017年4月	創元社	グループは、医療現場のみならず、地域保健、福祉、矯正、教育など多方面で活用されているが、その中核を担う集団精神療法となると、まだまだその実践事例は少ないのが現状である。本書は、研修・福祉・教育・医療領域での、ユニークな30の実践事例を詳細に取り上げることで、その多様な展開と自由で柔軟な臨床のあり方の中から、今後のグループの未来を探ろうとする(内容紹介より)。 本人担当カ所: 精神科認定看護師資格取得のためのグループに関する研修、pp64-74
3. アディクション・パーソナリティ障害の看護ケア	共	2017年11月	中央法規	医学的な知識をわかりやすくまとめているほか、クロスアディクションへの対応など、多くの実践事例をまとめた(内容紹介より)。 本人担当カ所: 監修、プランニングのポイント、pp74-82
4. ドラッグ問題をどう教えるか	共	2013年8月	解放出版	薬物の問題は、いずれの時代においても重要な社会的問題である。性別や職業等の違いにかかわらず、あらゆる立場の人の逮捕が、後をたたない。ダメ、ゼッタイといった規制だけでは、薬物乱用の防止は困難な現状にある。本書では、もう一步踏み込んで、学校など子どもの薬物乱用防止教育に携わる大人、主に中学、高校の教師に向けて企画し、養護教諭、保健師、看護師、精神科医、弁護士、薬物依存からの回復者など多様な分野の執筆により、理論編と具体的なQ&A、ワークシートといった構成での実践的な入門書である。 本人担当部分: 監修、「はじめに」、「8. ドラッグ問題への取り組みと感情」(p. 72-77)、他「Q&Aの一部」
5. アディクション看護学	共	2011年9月	メデカルフレンド社	看護学生をはじめ、精神科・一般科の看護師や看護管理者、地域で働く看護職者を対象とした、アディクション問題にかかわるための知識・技術を修得をねらった解説書。 本人担当部分: 第七章-2-「薬物依存症」(p. 215-224)
6. アディクション看護	共	2008年8月	医学書院	依存症からメタボまで、「意思の障害」に苦しんでいる人々への看護について、アディクションといった捉え方での解説書。様々なアディクションの領域が記されている中で、「薬物依存症と看護」に関する部分を担当した。日本や海外における文献検討や、実際の体験、自身の研究結果を用いながら、薬物依存症の回復システムやその看護についての知識や理解を深められるような内容を論じた。 本人担当部分: II-2「薬物依存症と看護」(p. 74-101)
7. 薬物・アルコール依存症看護	共	2008年7月	精神看護出版	日本精神科看護技術協会の精神科認定看護師制度の研修会での利用を主たる目的とした「実践 精神科看護テキスト」のシリーズの中の一書籍。薬物・アルコール依存症に関する書籍中、薬物・アルコール依存症におけるセルフヘルプグループについて、歴史や意味、実際などについて論じた。 本人担当部分: 第四章「セルフヘルプグループ」(p. 132-146)
8. クロニックイリネス 人と病いの新たなかかわり (翻訳)	共	2007年5月	医学書院	(原書: Lubkin, I. M. & Larse, P. D. ed. (2002). Chronic Illness: Impact and Interventions 5th.) 本人担当部分: 第12章「無力感」(Onega, L. L. & Larsen, P. D. 著、Powerlessness) (p. 233-243)、第23章「長期ケア」(Barnes, S. J. 著、long-term Care) (p. 433-451) 共訳者名: 黒江ゆり子(監訳)、河井伸子、市橋恵子、中岡亜希子、北原保世、田中克子、山崎裕美子、森川浩子、田中結華、鬼塚哲郎、寶田穂、奥宮暁子、藤澤まこと、古城門靖子、グレッグ美鈴、普照早苗
9. A子と依存症—絶望と回復の軌跡—	共	2007年12月	晃洋書房	女性の依存症に焦点をあてた書籍。摂食障害、薬物依存症、ギャンブル、DVといったアディクションの現状と回復支援について、当事者、支援者、研究者などの様々な立場で回復や回復支援について論じている。その中で、看護の現状や支援のあり方への

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
1 著書				
10. 糖尿病のケアリング (翻訳)	共	2002年4月	医学書院	提言について記した。 本人担当部分：第六章「薬物依存症者への回復支援 において看護は何かができるのか」(p.165-184) (原書：Edelsich & Brodsky(1998). Diabetes: Car ing for your emotions as well as your health.)
11. 慢性疾患の病みの軌跡 コービン とストラウスによる看護モデル (翻訳)	共	1995年1月	医学書院	本人担当部分：第4章「適応の段階」(Stages of ad aptation)(p.78-104)、第5章「選択と賭け」(The choices and the stakes)(p.105-138) 共訳者名：黒江ゆり子、市橋恵子、實田徳 (原書：Woog, P. ed.(1992).The chronic illness trajectory framework: The Corbin and Strauss n ursing model.) 本人担当部分：第5章 慢性の精神疾患—始まりも終 わりもない軌跡—(Rawnsley, M.M.著、The Chronic Mental Illness: Timeless trajectory)(p.77 -98) 共訳者名：黒江ゆり子、市橋恵子、實田徳
2 学位論文				
1. 博士論文「薬物依存症者をケアす る看護師とピアスタッフの体験 ～ケアにおける無力感の意味～」	単	2007年3月	日本赤十字看護大学大 学院	薬物の乱用や依存に関連する問題は世界的に問題と なっており、日本も例外ではない。精神保健医療福 祉の領域も、その対策における役割を担うものの、 薬物依存症者への看護の系統的な研究は行われてお らず、その意味も明らかではない。そこで、本研究 では、薬物依存症者と薬物依存症者の看護やケアに 携わっている看護師、回復支援施設のピアスタッフ の語りから、薬物依存症者への看護の意味を明らか にすることを目的とした。本論文では、看護師の体 験とピアスタッフの体験を描き出し、既に発表した 薬物依存症者本人の体験とも関連づけながら、薬物 依存症者への看護の意味を考察した。その結果、薬 物依存症者へのケアにおいて感じる無力感が、ケア の意味に変化をもたらすターニングとなっているこ とが明らかとなった。ケアの質の向上には、看護師 が無力感をターニングとして、成長できるような、 支援が必要である。
2. 修士論文「精神科病棟における患 者間の相互作用の諸相」	単	1997年3月	日本赤十字看護大学大 学院	「精神科病棟において、患者同士が日常どのよう にかかわり合い影響し合っているのかを描きだし、そ の意味を考察すること」を目的として、精神科重急 性期病棟にて、参加観察を行った。得られたデータ を、帰納的に分類し、患者間において、“援助行動 ”と呼ぶにふさわしい相互作用が頻繁に起こってい ることが明らかとなった。患者たちは、援助するこ とを欲し、援助せずにはいられない様子であった。 その心理にはサールズの提唱する治療的欲動の存在 が考えられた。また、患者間の援助行動に内在する 問題も明らかとなった。
3 学術論文				
1. 精神科長期入院患者の退院支援に おける課題 長期入院を体験した 統合失調症をもつ人の語りを通し て	共	2018年6月	日本精神保健看護学会 誌、27 (1)、91-99	精神科長期入院の体験を有する人の語りを通して、 入院から退院に至るまでの体験を描き出し、その体 験から退院支援に向けての課題を考察することを目 的とした。精神科病棟において1年以上2年未満の長 期入院を体験している5名を対象とした。参加者たち の語りからは、入院生活において、どうすればさま ざまな規則に慣れ、困りことや災いを避けることが で、居心地の良い生活ができるかを考えながら行動 できる力を感じることができた。したがって、入院 生活では、どうすれば社会のさまざまな規則に慣れ 、社会生活・日常生活上の困りことや災いを避け、 居心地の良い地域生活ができるか、それを患者とと もに考えることが患者の退院支援においても重要な 要素であると考えられた。 本人担当部分：研究全体を通して 著者：鷺忍、實田徳、心光世津子
2. 職場での体験を語ること グループ を通した中堅看護師の感情知性 (EI)の育成	共	2016年6月	日本精神保健看護学会 誌、25 (1)、pp.19-28	看護師は日常的な感情労働の代償として共感疲労に 陥る危険性が高く、職場における自らの感情面での 健康状態に気づき、対処する必要がある。そのため には、感情知性(emotional intelligence:EI)と呼ば れる能力が重要であると言われている。そこで本研 究では、病棟チームの柱となって働いている中堅 看護師を対象として言語による交流を中心としたグル ープを毎月1回、計10回行い、そこで語ることが中堅 看護師のEI育成に有用であることを実証的に明らか にすることにした。研究参加者は総合病院に勤務す る実務経験4年以上の中堅看護師7名である。結果と して、参加者たちは仕事にまつわる不安や管理者へ の期待と不満を徐々に語りだし、それが過去の体験 とつながりがあることに気づいた。こうして彼らは

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
3. 7つのライフストーリーに描き出された他者への「言いづらさ」	共	2011年6月	看護研究、Vol. 44(3)、 p. 298-304	、グループの中で新たな他者への信頼と自信を取り戻していった。 本人担当部分：計画・考察 著者：古城門 靖子赤沢 雪路、曾根原 純子、武井 麻子、 實田 穂
4. 研究と発表、倫理	単	2011年6月	学会誌 集団精神療法、 27(1)、p. 55-59	慢性の病いをもつ7人の人へのインタビューを通して描き出された体験をもとに、一人一人の言いづらさの意味について検討しながら、言いづらさが意味するものについて考察をした。 本人担当部分：データ収集、分析 共著者名：黒江ゆり子、實田穂、市橋恵子、森谷利香、中岡亜希子、古城門靖子、田中結華、河井伸子
5. 精神障がいに対するセルフスティグマから解放されたCさんのライフストーリー	単	2011年6月	看護研究、Vol. 44(3)、 p. 268-273	集団精神療法に関する研究および発表における倫理的側面について、臨床研究や看護研究の倫理的側面と比較検討しながら、適応と課題について論じた。
6. 慢性の病いにおけるライフストーリーインタビューから創生されるもの	共	2011年6月	看護研究、Vol. 44(3)、 p. 237-246	精神障がいをもつCさんにインタビューを行い、ライフストーリーにおける言いづらさを伴う体験を描き出した。Cさんにとって、精神障がいへのセルフスティグマが、病いに関することを言いづらくさせていた。医療者や同じ障がいをもつ仲間との関係の中で、自然に語れるようになったCさんは、言う人には言うが言わなくてもいい人には言わないと、言うことが辛い体験ではなくなっていた。 本人担当部分：全行程 共著者名：實田穂、古城門康子
7. 「言いづらさ」は何を意味するのか	共	2011年6月	看護研究、Vol. 44(3)、 p. 305-315	「慢性の病いにおける言いづらさ」の研究において、「言いづらさ」に着眼する背景および看護学的意義について、論じた。研究全体の緒言にあたる部分。 本人担当部分：資料提供、考察 共著者名：黒江ゆり子、實田穂、藤澤まこと
8. アディクション問題にかかわる看護師支援について：語り合える場としてのグループ	単	2010年3月	大阪市立大学看護学雑誌、Vol. 6、 p. 59-61	慢性の病いをもつ6人の人へのインタビューを通して描きだされた体験をもとに、言いづらさに関連する体験が意味することについて考察した。その結果、言いづらさの体験は、①その人自身の混乱や葛藤、②自分に生じていることへの受け入れづらさ、③周囲の人にわかってもらいにくい、といった意味があることが示唆された。 本人担当部分：データ収集、分析、執筆 共著者名：實田穂、黒江ゆり子、市橋恵子、中岡亜希子、森谷利香、古城門靖子、田中結華
9. 薬物依存症者の回復とグループ	単	2009年6月	学会誌 集団精神療法、 Vol. 25(1)、p. 25-31	薬物依存症の回復のためのグループとしては、セルフヘルプ・グループの意義が大きい。一方で保健医療機関では治療グループが、矯正施設では教育・指導グループが行われている。また、家族やボランティアといった回復に関わる支援者たちの間でもグループが行われている。そこで本論文では、薬物依存症の回復のための多様なグループの概観を述べ、それらのグループが一人ひとりの薬物依存症者の回復を支えるためには何が必要かを考察した。
10. 薬物依存症者への看護における無力感の意味 ―看護師の語りから―	単	2009年6月	日本精神保健看護学会誌、Vol. 18(1)、p. 10-15	薬物依存症の回復のためのグループとしては、セルフヘルプ・グループの意義が大きい。一方で保健医療機関では治療グループが、矯正施設では教育・指導グループが行われている。また、家族やボランティアといった回復に関わる支援者たちの間でもグループが行われている。そこで本論文では、薬物依存症の回復のための多様なグループの概観を述べ、それらのグループが一人ひとりの薬物依存症者の回復を支えるためには何が必要かを考察した。
11. 薬物依存症者にとっての精神科病棟への入院体験 ―複数回の入院を体験した人の語りから―	共	2006年9月	日本精神保健看護学会誌Vol. 15(1)、p. 1-10	薬物依存症者への看護の実践経験を有する看護師に半構造化インタビューを行い、看護の体験を描き出し、薬物依存症者への看護の意味を明らかにした。その結果、看護師と薬物依存症者の感情には「無意識の対称性」がみられた。看護師は、薬物依存症者に「巻き込まれない」「負けない」ように看護を継続するも、薬物をやめさせることは困難だった。看護の限界や無力に気づいた看護師は、葛藤しながらも、患者との対話を大事にしたコラボレイティブな関係を築いていった。看護の限界や無力に気づくことは、看護の質の変化へのターニングとなっていた。また、薬物依存症者への看護には、患者とのコラボレイティブな関係を通して相互に成長できる意味があると考えられた。 實田穂、武井麻子
12. 精神看護における「生活者」とい	共	2006年9月	看護研究、Vol. 39(5)、	古城門靖子、實田穂

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
う視点について			p. 39-44	
13. 看護研究において人々の「生活」を知るための方法 —インタビューで生じること—	共	2006年9月	看護研究、Vol. 39(5)、p. 101-109	實田穂、黒江ゆり子、中岡亜希子
14. 日本における薬物依存症患者への看護に関する文献的考察	単	2005年3月	大阪市立大学看護学雑誌Vol. 1、p. 11-19	
15. 依存症専門病棟のない病院における薬物依存症患者の入退院状況 —受け入れ初期の現状にみる看護への課題—	共	2003年12月	病院・地域精神医学、Vol. 46(3)、p. 94-103	實田穂、須藤藍子、松本広子、山尾幸子
16. 2年間に亘り「拒否」し続けた患者と看護婦のかかわり —患者—看護婦関係にみる悪循環—	共	2002年5月	日本精神保健看護学会誌11(1)、p. 43-49	白柿綾、實田穂
17. 依存症専門病棟のない病院における薬物依存症患者の入退院状況 —1999年度一年間の考察—	共	2001年9月	病院・地域精神医学、44(3)、p. 89-91	實田穂、須藤藍子、川原稔、山尾幸子、有我譲慶
18. 精神科病棟における患者間の援助行動の諸相	単	1999年6月	日本精神保健看護学会誌、8(1)、p. 1-11	
19. 今にして病棟家族懇談会を考える —家族の発言からの学び—	共	1999年3月	病院・地域精神医学、42(1)、p. 66-68	實田穂、疋田慎介、小林将元、大黒靖久、武田恵子、有本進
20. 急性期受け入れ閉鎖病棟における薬物依存症者の看護 —専門病棟のない病院での現状—	共	1998年8月	精神科看護、25(6)、p. 15-20	武田恵子、實田穂、川原稔
21. 精神分裂病患者の早期退院に関与する精神症状及び日常生活・社会生活上の機能障害との関連	共	1998年2月	日本看護学会誌、6(1)、p. 36-45	稲岡文昭、西村俊彦、福士千代、須藤秀利、野方俊郎、小林あきみ、實田穂
22. 臨床看護実習における学生の疲弊と学習意欲	共	1994年6月	日本精神保健看護学会誌、3(1)、p. 64-73	實田穂、黒江ゆり子
23. 臨床看護実習における学生の学習に対する思い・行動と実習の楽しさ	共	1994年11月	奈良文化女子短期大学紀要、25、p. 111-121	實田穂、黒江ゆり子
24. 看護における人間のとらえ方(2) —カリスタ・ロイ理論の考察—	共	1994年11月	奈良文化女子短期大学紀要、25、p. 123-135	黒江ゆり子、實田穂
25. 看護における人間のとらえ方 —マーサ・ロジャース理論の考察—	共	1993年11月	奈良文化女子短期大学紀要、24、p. 107-117	黒江ゆり子、實田穂
26. 臨床看護実習における学生の状態不安STAIとBURNOUT傾向	共	1992年11月	奈良文化女子短期大学紀要、23、p. 191-200	實田穂、黒江ゆり子
27. 看護学講座の成果と課題	共	1992年11月	奈良文化女子短期大学紀要、23、p. 201-216	坂本雅代、弓田洋子、實田穂
28. 行動観察による痴呆患者の精神状態評価尺度(NMスケール)および日常生活動作能力評価尺度(N-ADL)の作成	共	1988年11月	臨床精神医学17(11)、p. 1653-1668	小林敏子、播口之朗、西村健、武田雅俊、福永知子、井上修、田中重実、近藤秀樹、新川久義、山下真理子、溝口幸枝、若松都志子、實田穂、十祖恵子
29. 各種看護操作の頭蓋内圧に及ぼす影響	共	1986年8月	救急医学、10(8)、p. 1003-1008	畑恵子、實田穂、松原美津子、安藤邦子、阪本敏久、定光大海、大橋教良、杉本侃、澤田裕介
30. 意識レベルの評価法 (Glasgow Coma Scale) の効果的運用法について	共	1984年11月	看護技術、30(15)、p. 46-50	畑恵子、實田穂、松原美津子、安藤邦子、大橋教良、澤田裕介

その他

1. 学会ゲストスピーカー

1. 看護における多様性と感情		2016年9月	第15回日本アディクション看護学会 会長講演、p21	大会長、会長講演
2. 薬物依存への看護 —ドラッグ問題をどう教えるか—		2015年9月	第46回日本看護学会—精神看護—学術集会(教育講演)、pp. 32-33	教育講演
3. 地域が生き活きるレジャー・レクリエーションの可能性 —看護におけるレクリエーション—		2015年12月	日本レジャー・レクリエーション学会 第45回学術大会(シンポジウム)、p. 21	シンポジスト

2. 学会発表

1. アディクション問題にかかわる看護師のためのサポートグループの意義—計50回のグループの実践を通して—	共	2018年6月	日本精神保健看護学会第28回学術集会、p174	實田 穂、高間さとみ、冨喜田 恵子
2. 労働者における精神的健康の維持・回復を支えるその人自身の力	共	2018年11月	第26回日本産業ストレス学会、p176	鈴木 典子、實田 穂
3. 地域で生活している統合失調症をもつ人にとっての精神科への長期入院体験	共	2017年6月	日本精神保健看護学会 第27回学術集会 プログラム・抄録集、p13	鷲 忍・心光 世津子・實田 穂

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
4. 地域で生活している統合失調症をもつ人にとっての精神科への長期入院体験	共	2017年6月	9 日本精神保健看護学会 第27回学術集会 プ ログラム・抄録集、p13 9	演者：鷺 忍・心光 世津子・寶田 穂
5. Difficulty in Telling to Others, Experienced by People Suffering from Intractable Neurological Disease in Their Daily Lives in Japan	共	2017年10月	Transcultural Nursing Society 43rd Annual Conference、p28	Yuriko Kuroe, Minori Takarada, Akiko Nakaoka, & Riko Moriya
6. The Model of Emotional Support for Nursing Professionals in Substance use Treatment: From the Results of the Interview Studies on Nurses in the USA and Japan	共	2017年10月	Transcultural Nursing Society 43rd Annual Conference、p27	Minori Takarada, Nahoko Nishizawa, Keiko Takita, & Toshie Taniguchi
7. Qualitative research on the changes among nursing professionals in substance use treatment	共	2016年3月	19th EAFONS, Chiba Japan, pp103-104	Minori Takarada, Nahoko Nishizawa, Satomi Takama, Keiko Takita & Toshie Taniguchi
8. "Difficulty in Telling to others" Experienced by People Living with Chronic Illness	共	2016年10月	Transcultural Nursing Society 42nd Annual Conference, Cincinnati, OH, p30	Yuriko Kuroe & Minori Takarada
9. 薬物依存症における他者への「言いづらさ」	単	2015年9月	第14回アディクション看護学会学術集会、p. 39	
10. The importance of emotional support group for nurses involved in the treatment of patients with substance use problems and their families	共	2015年6月	ICN Conference 2015, p. 53	Satomi Okumura, Minori Takarada & Keiko Takita
11. 大学病院一般科病棟での精神症状を有する患者の看護における困難なことから	共	2013年11月	第26回 日本総合病院精神医学会総会	岡本理英、小林美保、稲田律子、寶田穂、
12. 看護事例研究/報告にみる長期入院患者の退院の目的	共	2012年6月	第22回日本精神保健看護学会学術集会	西川裕美、高間さとみ、寶田穂
13. 慢性の病いにおける他者への言いづらさ ―看護職者のストーリーから見いだされる“配慮”について―	共	2012年6月	第6回日本慢性看護学会学術集会	黒江ゆり子、寶田穂、市橋恵子、他
14. アディクション問題にかかわる看護師サポートグループの検討 ―語られた話題の特徴に焦点をあてて―	共	2012年6月	第22回日本精神保健看護学会学術集会	寶田穂、茅喜田恵子、高間さとみ
15. 薬物依存症者への看護における質的变化の様相や特徴	共	2011年12月	第31回日本看護科学学会学術集会	寶田穂、高間さとみ
16. パーキンソン病と言いづらさ	共	2010年6月	第4回日本慢性看護学会	中岡亜希子、黒江ゆり子、寶田穂、他
17. こころの病いと言いづらさ	共	2010年6月	第4回日本慢性看護学会	寶田穂、鈴木靖子、黒江ゆり子、他
18. 慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」が意味するもの ―5つのライフストーリーより―	共	2010年12月	第30回日本看護科学学会学術集会	黒江ゆり子、寶田穂、市橋恵子、他
19. 薬物依存症者への看護における限界や無力の意味	単	2008年8月	第39回日本看護学会精神看護、第39回日本看護学会精神看護抄録集、p. 71	
20. Nursing Care of Recovery Process for the Patient with Drug Addiction	共	2008年2月	The 11th EAFONS The Future of Doctoral Nursing Programs in Asia: Cooperation & Integration across Nations (Taiwan)	Minori TAKARADA, Chie KURATA, Kaori TAUCHI, Uriko KUROE
21. 薬物依存症からの回復と共感される体験 ―4人の女性の回復における困難と対処の語りから―	共	2007年	第6回学術集会日本アディクション看護学会大会抄録集、28	寶田穂、倉田智恵
3. 総説				
1. アディクション・ライブラリーを企画 アディクションについて「語る本」の図書館	単	2017年3月	精神看護、20 (2) 、 pp 146-153	
2. 看護における多様性と感情	単	2017年3月	武庫川女子大学看護学ジャーナル、2、pp7-11	
3. 薬物乱用や依存の問題をもつ人の回復支援における看護職のあり方	単	2015年4月	公衆衛生、79 (4) 、 pp . 237-240	

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3. 総説				
—拒否の連鎖から支援の連鎖へ—				
4. 薬物依存症をもつ当事者の活動と看護 ～価値観の揺らぎを通して見えてくる患者—看護師関係とは～	単	2008年9月	精神科看護、Vol. 35(9)、p. 12-17	
5. 卵から雛がかえるように —「回復させる」より「回復の場」づくり—	単	2006年2月	精神科看護、Vol. 33(2)、p. 78-81	
6. 病院と地域の間をかけ橋を	単	2003年7月	精神看護、Vol. 6(4)、p. 50-55	
7. ダイナミックな学びの場としての実習環境 —精神看護学実習の一例から考える—	単	2003年4月	精神科看護、Vol. 30、p. 20-24	
8. サンパウロ市の薬物依存症ケアの現状(後編) 治療・リハビリテーションの場を訪れて	単	2002年2月	精神看護、5(2)、p. 70-74	
9. 「感情労働」この言葉に誘発されて	単	2001年6月	精神看護、4(4)、p. 66-69	
10. サンパウロ市の薬物依存症ケアの現状(前編) 治療・リハビリテーションの場を訪れて	単	2001年12月	精神看護、5(1)、p. 69-74	
11. 重症な患者さんの回復のイメージと看護職の手立て	単	1999年6月	精神看護、2(4)、p. 30-37	
12. フィールドワークの経験(研究者として臨床に入る) 患者間の関係に焦点をあてて	単	1999年11月	看護管理、9(11)、p. 874-878	
4. 芸術(建築模型等含む)・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」に関する知の構築	共	2018年12月	第38回日本看護科学学会学術集会、交流集会、No K19(電子抄録)	黒江 ゆり子、實田 穂、田中 結華、市橋 恵子、中岡 亜希子、森谷 利香、藤澤まこと
2. アディクション問題にかかわる援助職者サポートグループ2015	共	2015年9月	第14回アディクション看護学会学術集会(交流集会)、p. 26	實田 穂、奥村さとみ、多喜田恵子
3. アディクション問題にかかわる援助職者サポートグループ2016	共	2015年9月	第15回アディクション看護学会学術集会(交流集会)、p. 62	永見もも子、實田 穂、奥村さとみ
4. 慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」の事象と先行要件に導かれる看護のあり方	共	2015年12月	第35回日本看護科学学会学術集会(交流集会)、p. 198	黒江 ゆり子、實田 穂、田中 結華、藤澤 まこと、中岡 亜希子、森谷 利香、市橋 恵子、河井伸子、古城門 靖子
5. アディクション問題にかかわる看護師の	共	2014年6月	第23回日本精神保健看護学会学術集会ワークショップ	實田穂、多喜田恵子、高間さとみ
6. アディクション問題にかかわる看護師のサポートグループ	共	2013年6月	第23回日本精神保健看護学会学術集会ワークショップ	實田穂、多喜田恵子、高間さとみ
7. 慢性の病における他者への「言いづらさ」—看護職者のストーリーから—	共	2011年6月	第5回日本慢性看護学会交流集会	黒江ゆり子、實田穂、市橋恵子、他
8. 慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」	共	2010年6月	第4回日本慢性看護学会交流集会	黒江ゆり子、市橋恵子、藤澤まこと、實田穂、他
6. 研究費の取得状況				
1. 薬物依存症者の家族の「言いづらさ」にかんする研究	共	2018年～2020	日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C))	分担者
2. 慢性の病いにおける「言いづらさ」を基板とした看護理論の創成とその活用	共	2017年4月～2019	日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C))	分担者
3. アディクション問題にかかわる看護職者支援モデルに基づく支援プログラムの開発	共	2016年4月～2020	日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C))	代表者
4. アディクション問題にかかわる看護師支援モデルの試案作成	共	2013年4月～2016年3月	日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C))	代表者
5. 慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」と看護のあり方を基盤とした看護理論の構築	共	2012年4月～2016年3月	日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C))	分担者
6. 薬物依存症者への看護に関する質	共	2009年4月～	日本学術振興会科学研	代表者

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
-------------	---------	-----------	-------------------	----

6. 研究費の取得状況

的变化の分析と理論基盤の構築		2013年3月	研究補助金（基盤研究（C））	
7. 慢性の病における他者への『言いづらさ』と看護のあり方についての研究	共	2008年4月～2012年3月	文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C））	分担者
8. 慢性の病における他者への『言いづらさ』についての研究	共	2005年4月～2008年3月	文部科学省科学研究費補助金（萌芽研究）	分担者
9. 薬物依存症からの回復過程における援助に関する研究	単	2005年4月～2007年3月	文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C））	代表者
10. 女性薬物依存症者への回復支援調査事業	共	2003年4月～2004年3月	独立行政法人福祉医療機構「高齢者・障害者・福祉基金」助成事業	代表者
11. 薬物依存症からの回復における入院期間中の看護の意義・限界について	単	2001年4月～2003年3月	文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C））	代表者

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2013年～現在	日本看護科学学会 和文誌専任査読委員
2. 2013年～現在	日本精神保健看護学会 代議員（旧 評議員）
3. 2012年～現在	日本精神保健看護学会 査読委員
4. 2008年7月～現在	日本集団精神療法学会 教育研修委員会 職域別委員
5. ～現在	日本アディクション看護学会 査読委員
	科学研究費助成事業 第1段審査（書面審査）委員 平成26年度、27年度、29年度
7. ～現在	日本精神科看護技術協会（旧 看護技術協会） 査読委員